
出番ですよ！ 様！

っペー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出番ですよ！ 様！

【コード】

N6061Y

【作者名】

つべー

【あらすじ】

・・・あのね、確かにイケメンじゃあ色んな作品と被るのは分かるよ。

でもさあ、でもさあ！

途中までテンプレだったのに・・・(前書き)

どうもこんにちは。実は前に一話だけしか投稿しなかった小説があるのですが、

そちらの方は気にしないでいただけると幸いです。

ごめんねええええクロエネンンンンンンン！！

途中までテンプレだったのに・・・

白い部屋、目の前にはお爺さん。思い出せない名前。

はい、解ります。テンプレだね。

何か能力とかくれるって言うしそろそろ神様の方に意識を向けよう。

死因もただの事故死、気がかりもさしてなし。割りきらなくちゃ。

.....

『...という訳で、違う世界に色々（・・・）介入してもらっ』

? あ、大半聞いてなかった。それに色々？

『では能力のほうだが・・・汝の脳裏に写った者の力を強化した上
与えるでしょう。何、心配するでない。静かに我の話を聞いてくれ
たのだ。悪いようにはせん。』

何か得したっばい。・・・ってそれより想像したキャラクター!?

うわ、何にしようかな、ええとええと・・・

!?

.....

.....

.....

.....

.....

.....

『ほうほう、中々渋いところを攻めたな。ええと、コヤツはホラーゲームの・・・』

ああああん!!私のバカ!バカバカ!!

よりもよって何で!何で!?!やはりあれか!?!最後に見たのが大粒の涙を流す幼なじみでも何でもなくて!

返り血のついたカラーコーン(.....)だったからか!!!

身体能力

異常なまでの贅力、防御力、再生力を誇るが、動きは鈍重。手先も不器用。だが裏世界ではその限りではない。また、その世界に合った調整がされるようだ。

処刑の大錠

問答無用の殺害能力を持つ。物騒。

とんでもない質量があり、鋼鉄もバターのように切り裂く。物騒。当然、とても重い。故に三角頭はいつもひきづって運ぶ。面倒。手放しても一定以上離れれば手の内に。不思議！

さて、こんな物をもたせた理由は・・・

三角兜

様の象徴とも呼べる兜。何故か視界は良好。もちろん取り外し不可能。作者も中身なんか考えてません。

とにかく硬い。バレットM82？余裕です。

腰巻・・・エプロン？

妙な質感がする何かの革でできた布。こちらも何故か頑丈。

別に他の服に着替えることもできる・・・が、いつの間にか血糊がべったり付く。ある意味マダムキラー！

どうやら神様が、珍しいものだからとついつい張り切ってしまった模様。

さすが神様っ！おれたちにできない事を平然とやってのけるッ。そこにシビれる！ あこが（ry

途中までテンプレだったのに・・・(後書き)

誰か似たような趣向の人がいると信じたい

神と魔人

『フム・・・やはり人間にしては変わった者だったな。大抵なら激昂し、神に対して暴力を振るうものすらいるといふのに』

真つ白な空間の中、老人が・・・いや、老人だったもの（・・・
・・・）が囁いた。

『しかし本当に助かった。転生なり何なりさせても普通なら主人公となる。だというのに、悪役を買ってでもらえるとは』

既に何かが渦巻いているだけの存在はブツブツと囁き続ける。

『それも”ダークヒーロー”でも何でもない、ただ絶望を与え打倒される”ヴィラン”』

『物語を停滞させることなく、更なる進化を促すもの。』

遂に存在は白に溶け込み消えたが、ポツリと最後に冷酷な声色を出した。

『だが念には念を入れる。汝の魂に宿命を刻ませてもらうし因果関係も弄らせてもらおう。』

『さらばだ　　、　　こんにちはレッドピラミッドシング』

「!？」

何が起こった!？ここはどこだ!？私は!私は!？わた・・・!？

叫ぶ。

「ギツギギ・・・ツギイイイ!!!!!!」

聞こえたのは耳障りな金属音。右手が重い。何かを握り締めている？

右手を見してみる。

・・・そこにあるのは血と錆に覆われた大鉈。

頬に触れようとした。

・・・随分手前で固いものに触れた。

周りを見渡す。

・・・・・・血だ。錆だ。闇だ。異形（同胞）だ。

そうか。

思い出した。

私の名前のことではない。そんなものはとうに消された。神に刻まれた記憶だ。

そ……そして此処は私だ。

いや全く、随分な役回りだ。確かに人？の話を聞かなかった私が悪いが。

改めて辺りをよく見てみる。……うん、めつたくそ。しかし嫌悪感はない。かといって愛着を感じるわけでもない。

私自身も随分変わったのではないか。ついさっきまでなら”ああああああん！！”と泣き喚いたであろうが。

それにしてもこの空間が私自身だとは恐れ入る。

固有結界 裏世界【サイレントヒル】。私が内包する世界。

少なくとも型月の世界に関わるのは決定か？別に吸血鬼でも何でもないが。

しっかし悪役かあ。戦い方を覚えなければいけないようだ。しばらくはこの世界で鉈の振り方でも練習するか。幸い的ならいくらでもいる。同胞といっても情があるわけではなし、というよりそもそも倫理感や道徳心などといったものは全て消されてしまったようだ。

欲望や興味のままに殺戮する魔人。ヴィランにはうってつけか。

・・・あ、バブルヘッドナースちゃんだ。この娘はまた違う扱い方をしよう。

神と魔人（後書き）

バブルヘッドナーは業の深いエロスですね。
理解出来ない？すみません
どこに乱入させようかな。

相棒（前書き）

今流行りのZeroに決定。

普段報われない例のあの子に大接近？

相棒

そろそろいいか。固有結界の中で独り思う。

鉦の振り方も、異形の使役も習得した。何より流石に飽きてきた。

そろそろいいだろう。

さあ、出番だ。

「満ったせー満ったせー満ったしって満ったしって満ったせー」

血に濡れた薄暗い部屋、ニュース番組のアナウンサーの、感情のない声が響く。

狂人、雨生龍之介。

30人以上を殺害した猟奇殺人犯だが、最近殺人生活にマンネリ気味であり新しい刺激を求めている。

実家の土蔵にあった古文書の記述に沿って、冬木の地で儀式殺人を繰り返している。

儀式にインスピレーションを感じ遊び半分です事に興じていた龍之介だが、4度目の今回、ついに条件が揃ってしまったようだ。

龍之介が生き残らせた少年と雑談を押し付けている途中、右手に鋭い痛みが走った。

奇妙な模様が手の甲に現れると同時に、青白い光が魔方阵から発せられる。

召喚されたのは全体的に赤黒い雰囲気を持つ巨人。右手の大鉈には血鎧がこびり付き、何より目を引くその兜はなんとも言えぬ不気味な印象を抱かせる。彼は、一言も発せずその場に佇んでいた。

突然のことに戸惑う龍之介だが、何とか挨拶&自己紹介。

「ええっと……えっと雨生龍之介です。職業フリーター趣味は人殺し全般……」

対する三角頭、沈黙。

「あっあのさあ！お近づきの証に……一献どうすか？」

沈黙を続ける悪魔？との間に空気が持たず、取っしておいた少年を生贄に差し出して見ることにしたようだ。

「あれ。食べない？」

固有結界から出て、最初に見たのは殺人現場。

ん？雨生龍之介君？ははあ、青ひげの代わりとして介入か。

あれ？確か座とか言うところから召喚されるんじゃないか・・・

細かいことはいいか。

ふーむ。それにしてもF a t e / Z e r oか。

中々運が良かったかもしれないな。世界についてではない。マスターについてだ。

キャストのクラスに少しばかり不安があるが、まあどうとでもなるだろう。原作に介入してしっちゃんかめっちゃんに掻き回し、打倒されれば役目は終わる。

それまでは楽しませてもらうとするか・・・

何？ご一献？

ああ、そんなイベントあったね。私の腰巻に興味津々みたいだし、ちよっとプレゼントでもするか。

動く。龍之介君が腰巻に注目したようだが、其処は割愛。

拘束された少年を引っ掴む。他の英雄達ならこれ（・・・）を助け、龍之介君を抹殺するのかもしれないが、私は違う。

最後までパートナーとして付き合ってもらおう。

さて・・・

ベリイ！！

三角頭の悪魔がガキを持ち上げると、あっという間に剥ぎ取っちまいやがった。

その鮮やかな手際にちよっと放心してたら、ぼたぼたと血が滴るソレを俺に差し出してきた。

うわ、可愛いなおい。最近バブルヘッドナースちゃんぐらいしか可愛いのがなかったからなあ……。喋らないし。

目エキラキラさせちゃってえ〜

さて、これからどうしようかな？当然ジャンヌなんか知らんし……

あ。そうだ。初っ端からサーヴァントが大集合してたな。ソレに乱入しよう。

悪夢ゆめが広がりング……。古い？

相棒（後書き）

あの、ごめんなさい。なんか。
夜中なのでですね、テンションが、その、ね？

脅威（前書き）

ふとアイデアが思いついた時しか更新できませんね。
何気に扱いつらいお方です

脅威

二人の騎士が激突し、戦火を散らす倉庫街

天空より疾走してきた乱入者ライダーのせいで、場は混沌と化し狂犬と金ピカまで参戦

本来ならバーサーカーの視線にアーチャーが過剰反応、敏速A+で沸点に達したアーチャーの宝具射出をバーサーカーが難なく凌ぎきり・・・と言った展開の筈だった

だが、この平行世界には魔人がいる。どこまでも悪辣で残虐であると神の祝福を一身に受けた魔人が

変化は、バーサーカーの視線がアーチャーに向く直前

コンテナの影から異形が一匹這いずり出てきたことから始まる。

それは人ではなかった。力を込め切れない手でエクスカリバーを握る。

他のサーヴァントも一際（悪い意味で）目を引く怪物を凝視している……あれはなんだ？

今現在確認できたサーヴァントのクラスはセイバー（私）、ランサー、ライダーにバーサーカー。ポールの上で見下ろす傲慢不遜な男はどうみてもキャスターには当てはまらない。

となればアーチャーも埋まる。こうして整理すると、答えは明白だ。

「止まりなさい。その異形の者よ」

とはいっても、無論アレはキャスターではない。

こんな混戦に出張ってくるメイガス魔術師などいるものか。少なくとも現代には。

大方様子見のための使い魔だろう。異常なまでに醜悪な姿だが。そして予想通り静止の命令も聞かずにふらふらと近づいてくる。

何故人の形に近い造形なのかは疑問が残るが、どうせ非人道的な策略であろう。

使い魔を犠牲にしてほんの少しでも情報を得るつもりか。

くだらな

ズガァン！！

ツ!?

「それ以上私の視界で蠢くな・・・汚物めが」

どうにもこの男にとって異形は我慢出来ない存在だったようだ。

自分を差し置いて王を自称する雑種共を間引いてやるうかと苛立ちの募っていたアーチャーにとっては、ただ醜いだけで罪となる。

【王の財宝】を開放し、一つ、宝物を射出するだけで事足りた・・・いや、完全にオーバーキルだ。

闖入者があっさりと消え失せ、また英霊同士の緊張が高まるうとした

ぎっ

ぎっぎっ

ぎっ

ぎっ

おお、ちよっぴりビクツた。ひどいねー塵も残ってないよあれー。

あ、ギルガメッシュも帰っちゃった。バーサーカーの一番の見せ場がなくなっちゃったよ。

・・・でもセイバーに暴走するのは変わらないのね。

投石とコンテナの破片持って暴れてるよ。おっとランサーがかばった後に直ぐセイバーに攻撃。

やっぱり大筋は簡単には変わらないようだね・・・

！ いいこと考えた。

ほんの少しだけ正義の味方っぽいことになっちゃうかもしれないが、

補って余りあるくらい悪行を重ねねばいいだろう、多分。

まずはかき回すことから始めよう。

ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅ

ぎゅ

「つくう！」

やはり・・・手練二人に満足に剣も握れぬ体たらくでは不味すぎる
かつ・・・！

しかし私はアイリスフィールに勝利を誓った！何としてもこの状況
から巻き返してゆかねば・・・

ほんの僅かな時間、思考をしたスキにバーサーカーの投石が迫ってくる

ギギンツ

ガギツ

ギイン

ゴジツ

「ぐあっ！！」

しまった……！撃ち漏らしたかっ！！

怯んでしまった（……………）！！

「すまん、セイバー……せめて一瞬で討ち取ってやる……」

ランサーの悲哀の滲んだ声が聞こえる。

当然だ、こんな絶好の勝機を逃すわけがない。特に令呪に縛られた身とあれば。

……私はつ……！聖杯を手にするに値しないのかっ……！！

ドグチャツ

聞こえたのは妙に瑞々しく、しかし不快な怪音。

必殺を確信したランサーの顔が驚愕に彩られる。

ゲイ・ジャルグがセイバーの心臓に届くまでの刹那に満たない時間に、有り得ないことが起きた。

霧だ

ほんの一瞬の間には深い霧が満ちている

そして己の愛槍が貫いたものといえは・・・

「ゲギユギユイ・・・ギユチ・・・」

ボタボタバタッ

異形だ。表面は陶器製のようにひび割れているが、貫いた穴からレバーのような、ゲルのような赤黒い流動体がたれ流れている。

「~~~~ツ!~!」

グボッ ビュルッ

どこまでも不快だ。貫かれた異形は霧に沈み姿を消した

ギッ

ギッギッ

ギッギッギッ

霧が瞬間にして晴れた。

霧が瞬間にして晴れた。

霧が瞬間にして晴れた。
果たして其処にいたのは

呆然とするセイバー

眉をしかめるランサー

空からはライダーがチャリオットで降りてきた

バーサーカーはセイバーを見失った時点でさっさと退散したようだ

さて、ここにもう一人

ライダーを軽く超える巨躯に奇妙な三角頭

不吉な大鉦に、辺りを徘徊する蟲の群れ

最後のサーヴァントがようやく舞台に立った。

「!!!!!!???!?!?!」

ガタッ

何だ・・・アレは・・・!!

アサシンの視界を共有することによって、他のサーヴァントの様子を観察、師にお伝えして協力するのが我が役目。

願いもなく聖杯戦争に参加する事となったためだ。

サーヴァントたちの大混戦、観察するには願ってもないチャンス。

アーチャーまでも乱入し一時はどうなることかと思ったが、不機嫌
そうな顔をするだけで勝手に帰ってきたようだ。

いや、そんなことよりも。あのサーヴァントだ。

どうしようもなく心が掻き乱される……！

こんな事は初めてだ……！！

思わず顔を抑える。

引きつった表情筋の感触がした。

脅威（後書き）

主に深夜執筆しています。

朝見てみるとアイタタタタタタ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6061y/>

出番ですよ！ 様！

2012年1月15日03時46分発行